然るにマカタンに成功しても、この交渉が旨くゆかない場合がある。娘は男を惡しからず思つてゐるのだが、娘の親達が何うしても承知しないのだ。そんな場合は村の結婚裁判官である區長のところへ持ち出して、宜しく取り計つて貰ふのである。それには多少の鼻藥も要るが、大抵、區長が粹を利かして旨くやつて呉れる。そうなれば男の方から娘の親達に僅か二十金か、三十金の黄白を送つた位で、目出度く結婚のゴールに入れるのである。

ところが、娘も合意し、娘の親達も賛成してゐるマカタンでも、その嚴重な規則を守らねば飛んだことが起り、場合によると何もかもおしまひになることがある。それは、マカタンをやつた直後、すぐに男から娘の親達になすべき通知を忘れることである。これは特に馴合ひのマカタンの場合、娘側の親達も男側の親達もうつかり忘りやすいのであるが、若しもこれを怠り忘れるやうなことがあれば、その間隙に乘じて戀仇が「そのマカタンは異法だか

ら、結婚は成立しない」と妨害奪還を企てるのである。かゝる場合、區長（コントロラー）が男側に有利な判決を下さねば、折角の結婚も破局に終るのである。

さて、賣買結婚にせよ、掠奪結婚にせよ、かやうな蠻風が行はれてゐることは、取りもなほさず、女を一種の財産とみなし、その意志を認めないところに起因してゐると云へるのである。だからバリ島には女、特に娘を別の意味で非常に大切にする。娘の外出の時などは父親が附ききりである。餘程、その間隙に乘じなければ、マカタンなど思ひも寄らない。何しろ大切な商品なのだから、瑕物にしては大變である、嚴重に監視してゐるのである。

こんな風であるから、バリ島では必然女の貞操觀念を非常に喧しく云ふ。また女自身も一般に貞操の觀念が頗る深い。若しも素行が惡ければ、忽ち仲間から爪はじきをされ、萬一、誤つて未婚の若い娘が私生兒など生むやうな

事があれば、それこそ大變で、娘は赤兒諸共に前記の猛虎や野獸が跳梁してゐるジョンブラナンの刑地に流されるのである。

結婚式

さて、結婚式の當日、新郎は、その家の資格に應じて馬上、或は徒歩で、親戚友人に伴はれて、花嫁の家へ出向いてゆく。

嫁御寮の父親は、これを迎へて、入口で婿殿に檳榔樹の果を與へ、ガメラン・ゴンの奏樂を以て、大いに歡迎の意を表明する。

花嫁は、清められた寢室に待つてゐるが、この時始めて客間に出て、花婿の傍に坐るのである。それから式場へ連だつてゆく。

式は大抵村社や靈廟であげられるが、稀には家の中に設けてあるアルタアと言ふ神殿の前でも擧行される。

式を主宰する教司は、まめまめしく穀物や果實や草花や、そのほか金銀の小道具を式臺の上へ手づから案配して、參列者に向ひ合せて二列に座をかまへ、第一鐘を合圖に祝詞が始まつて、祝詞が終ると第二鐘で一同いきなり食卓を圍むのである。

食堂では、教司は神と惡魔に對して、荒波の浮世に旅立つ新夫婦を庇護給はらんことを祈り、その時新夫婦に椰子の實と印を與へる、二人はこれを地上へ强く投げつけてわざわざ壞し、これを拾ひ上げて頭越しに後方へ放り投げる、この仕草を東西南北の方向へ向つて行ふが、これは風神の惠みを乞ふ意味の祈りで、それから二人は教司の前へ進んで、トヤ・パングンタス（聖なる水）を注いで貰ひ、一たん各自の室へ退いて衣裳を改め、再び神前へ座つて、準備してある飯を互ひに與へながら食べる。これは今後互ひに助けたり助けられたりする事を意味してゐるが、同時に三三九度に通ふ儀式に當る

と見てよからう。以上で式は終了である。

そこで花嫁は文字通り玉の輿で、夫の家へ運ばれるのである。この時の衣裳は階級によつて異るのは勿論だが、すべて能ふかぎりの華美をきはめ、とつておきの香料を皮膚へまでぬりこめてゐる。

多彩に輝やく金銀寶石の髪飾が、大きな花園のやうな黒髪をおほどかにゆるがせて、金と銅の輿でゆく花嫁の姿は、誠に繪のやうである。

普通、ワオン・デャバア（下層）階級だと、男の方から娘を買取る形式を踏むが、實際はやはり双方の親が全經費を分擔する。

さて、晴れて二人が夫婦になれば、必ず忘れずに、戀の裁判官たる例の區長さんのところへ行き、改めて厚い御禮をするのである。

三、出産と迷信

産みの苦しみ

未婚の娘が、うかと得體の知れぬ赤ん坊など生めば、それこそ大變で、前項にも述べた通り虎の棲む荒野に流されたりするが、正式に結婚したものの出産は、非常に目出度いことゝして歡迎される。子供を家の寶とし、國の寶とすることはバリ島も日本と變りはない。

さて、妻が姙娠すると夫や親族のものは、相寄つて、これをいたはり、下へもおかぬ騒ぎをする。胎兒が九ヶ月に達すると、その父親は阿片の吸煙と賭博の耽溺を斷然やめる。やめなければ習慣法によつて同族から嚴しく禁じられるのである。このことは、バリ島に於ける父親にとつては、相當の苦し

い一ヶ月を強制されるわけであるが、生みの苦しみを味はせるといふ神様の御命令で、規約づけられたものかも知れない。

ところが愈々分娩といふことになると、これは又、酷いことになるものである。女が産氣付くと決して寢臺の上におかない。土間か、或は庭木の下に擔いで行つて二列に煉瓦を積み重ねた上に姙婦を腰掛けさせる。下には灰や砂を撒いて子供を生み落しても怪我をしない樣にしておく。周圍には部落でも屈强な荒くれ男が十數人で取り圍み、さらに御亭主が後から姙婦を抱きかゝへて、姙婦があばれないやうにするのである。

いよ〳〵分娩と見て取ると産婆さんが大聲で、それつと合圖する。すると そこを取卷く十數人の荒くれ男が、一齊に力をこめて、「頑張れ！　頑張れ！」と分娩の聲援を送るのである。

それで、いよ〳〵子供が産れると、先づ産婦の手當にかゝる。母親の手當

が終るまで嬰兒は顏といはず身體と云はず灰や砂にまみれて凄じく泣き叫んでゐる。

やがて嬰兒が取上げられるが、その灰まみれのまゝの上に椰子油を一面に塗り、さらに臼でついた大黃根の汁をつけて、灰や砂及び椰子油で汚れた嬰兒の顏や身體を洗ふと、全く綺麗になる。

次でバナ、と飯粒を糊のやうに磨りつぶしたものを嬰兒の口中に入れる。それを嬰兒が食はぬと、今度は無理に親指と大差指で押し込み詰め込むのである。これでは苦しいから、嬰兒も泣きながら已むなく呑み下すと云ふ次第である。

バリ島ではなぜかゝる固形物を亂暴にも嬰兒に與へるかといふと、液體である母親の乳だけでは固つた便をしないからだと杞憂してのことである。ところがかへつて、この杞憂は反對の効果を奏して、バリ島の子供は硬い便を

するどころか寧ろ軟らかすぎる便をしてゐる有様で、子供が病死するとすれば、大概、胃腸疾患だといふから困つたものである。

それは、さておき、若し産が重くて何うしても産み切らぬ時は、その家に何か神の祟りありとなして、分娩場を隣家の庭に移し、それでも、まだ産れぬ時は更にその姙婦をかついで、その隣りの庭へ移すのである。かくてもまだ生れぬときは、更に次々と廻し、六、七軒を歩く位は珍しくないとされてゐる。

これでは子供を生む母親も樂ではないが、生れて來る子供も大變である。餘程、母子は皆んなから優待して貰らはねば間尺に合ぬ勘定である。無論、生れ出る子は限りなく祝福され、その母親も譽めそやされるのであるが、特に生れた子が男子だと、その母親は、家族親戚友人から、非常な喜びの御祝ひをうけ、父親は椰子の樹を植えて、これを壽ぐことになるし、トヤ・バング

ンタスで三日間父母の體を淨めた上、産女は四十日間といふもの、絶對に人目を避けることを守らなければならない。これはその間に他人の目に觸れると、恐しい凶事が突發すると信じられてゐるからである。

男子出生三ヶ月目に頭髪を剪さみ、命名式が行はれ、その時には親戚知己友人を招待して、盛大な祭事が催される、これをネガウ・サレヒンと言ふのである。

その後は六ヶ月毎に、神へ供物をして子供の幸を祈禱し、滿四才で耳に穴を穿ける祭典があり、十六才に達すると、さきにも述べた如く齒に鑢をかけて平にする元服切式が行はれて、そこでその男の子が、初めて一人前に成長したことを證明するわけになる。

双生兒の場合

萬一双生兒が產れた時には、その双生兒が同性双生兒であればまだしも、若し異性双生兒だつたら大變である。何故ならばこの種の出產は何よりの不祥事とされてゐるので、その兩親は、村人によつて布でぐるぐる卷きにされた生れたての一男一女と共に、バアレ・バアレアンに乘せられる、さうして連れてゆかれる先は墓場である。

父親が出產當時たまたま野良仕事に出てゐたといふやうな場合でも、人々は田畑から、容赦なくそれを拉し來つて、墓場へ案內するのは同前である。

墓場へ連れて來ると言つても、さすがにいきなり親子四人を、墓穴へ埋めてしまふわけではない、墓場には村人によつて彼等の爲に急造された掘立小屋が準備されてゐて、親子のもの四人はその小屋で、四十二日の期間を、絕對他人と交涉なしに、消光しなくてはならないのである。たゞ食物を渡してくれる監視の者は別である。しかしその食物の他に、彼等の希望する樂器を

も與へてくれるといふ點は、いかにもバリ島らしい。

かういふ隔絕生活を規約づけた目的は、不憫ながら、この長い虐待の爲に、いまはしい双生の嬰兒が、天の方へ召されてくれればいいといふのであるから、若し赤坊が一方或は兩方とも、村人の目的通り瞑目してくれゝば、兩親は、たゞ希望しない四十二日の配所の日を、辛捧して眺めさへすれば濟むのである。萬一嬰兒のいづれの一方も、頑强に抵抗して殪れないといふことになると、四十二日を期して、一大生贄御供が開催されるに至るのである。

プラ・ダレム、卽ち「死神の神社」で、彼等の生活に大切な水牛から犬猫に至るまで、凡ゆる家畜が悉く、無愧な手段で屠られるのである。その上それらの屠られた家畜は祭壇などに祀られるのでもなく、そのまゝ燒けつく地面に曝しつぱなしにされるのである。

かういふ御供のあつた後では、昔だとその双生兒は宮殿に送られて、王樣

の奴隷として全生涯を捧げることに決つてゐた、つまり生贄の費用を王様が支給された爲である。しかし現今ではこの奴隷制度は廢止されてゐるので、御供の費用は一切その父親が支辨することになつてゐる、若し父親にそれだけの財力が無い場合は、村人が費用全部を負擔することになるので、双生兒はその代償として、プラ・デサ（村祠）の堂守となつて、その全生涯を務めねばならないのである。

又異性双生兒出產の場合はかういふ風に、單にその兩親が罰せられるばかりでなく、全村民にとつても亦一種の懲罰が課せられることになるので、四十二日間といふものは村民は如何なる祭儀にも參加することを遠慮しなければならないし、どんな祭禮をも擧行することが出來ないのである。たとへ盛大なパアレボン（火葬祭）の用意がすつかり備つてゐたとしても、たちどころに沙汰止みにせざるを得ないのだ。

異性双生兒を忌む風習は我國にも曾て存したが之程迄に徹底してゐるのは珍らしいとせねばならぬ。ともかく出產に關する風習は以何に宗教的の儀禮によつてゐるとはいへ戯風のそしりは免れぬであらう。

むすび、共榮圏のバリ島

繪のやうに美しいバリ島。

だが又そこは、無數の虎が跳梁し、その東隣りのロンボク島とは全く異れる諸種の植物が繁茂してゐる變つた島でもある。

島の女性は人形のやうに美しく、優しい。而も、それらの女性の數が、男性の數よりも遙かに多い、その數多い乙女等が半裸の姿も甲斐々々しく日々逞しく働き、反對に日がな一日雞を鬪はせて遊んでゐる呑氣な青年共を養つてさへゐるのだ。バリ島こそは、正しく現世の女護ヶ島でなくて何であらう。

又その島民は廿世紀の今日、一千年も昔の古風な生活を營んでゐるのである。しかも、回教圏の島々の中に在つて、よく、遙かに遠いかの印度の神秘な神々を祀り、その印度に於てすら殆んど滅びてゐる正統派婆羅門教を奉じ

てゐるのである。その上、嚴然たる階級制度、珍奇なる風俗習慣、さうしてこの島獨特の優美快味なる音樂、舞踊、彫刻、織物、繪畫、文學、哲學、思想を織りなせるバリ島民の生活が、如何に驚異的であり、獵奇的であるかは云ふまでもないことである。

尤も、かゝる不思議な夢幻の島バリも、近世の脚光を浴び、次第に觀光の、地となり、之に伴ふて島民の原始のまゝの平和な生活が破られ、女性のあのあらはなる乳房すらはや巷から消へ去らんとしてゐるのも、また事實ではある。然し、さうであつても、バリ島が近代に於ける最も珍奇特異なる存在であることには變りはない。されば、このバリ島を訪れずして、東亞の驚異は語れない。亦、この島を究めずして、南方の文化は論じ得ないであらう。

今や、バリ島は鬼畜の如き和蘭人の魔手から漸く開放されて、溫かい皇軍の懷にいだかれ、潑溂として更生の途を辿つてゐる。この秋に際して、バリ

島の新しき認識を得ることゝ、之が適切なる指導の方策を樹てることゝは、今日、吾等に課せられた當然の義務であり、急務であらう。

依つて、筆者は先づ、之等バリ島民の生活の中心たる神々と傳說を解說し、宗教、祭典の種々相を紹介し、之等宗教によつて爲れる藝術、風俗、習慣の樣々を捉へ、その有りのまゝの姿を描き、以て吾が國民一般に於ける南方認識の一助たらしめんと試み來つたものであるが、かゝるバリ島の性格と實際を通して見て、切に考へられることは、今後かゝる特殊なる島に對し、大東亞共榮圈內に於ける一存在として、その住民をしてよくその處を得しむ可く吾人は一體如何なる態度を以て臨み、如何なる方途を以て進むべきかといふことであらう。例へば、從來の如く單なる觀光の對象として之を見て行くべきか、或は精神乃至文化の方面から見て之を中古のまゝの狀態に殘しておくべきか、或ひはさらに、資源と產業の見地から、之を近代化すべきか、等々

の如き問題が自ら生起し來るであらう。

風光明媚なるバリ島が、今後も美しき觀光地として世界の旅行者の眼を樂しませる事は、勿論何ら差しつかへない事であらう。それは、內地の美しい風景が萬國の觀光客を常に惹きつけてゐるのと、少しもかはらない。然し乍ら、バリ島に於ける中古のまゝの生活樣態を、その文化や習慣と共に、永遠に保存せしむ可く保護を加へて行くことは、相當の困難を伴ふであらう。それは交通の發達による他の影響により次第にバリ島が近代化されて行くことは自然であり、また、それが如何に一千年來の風習ではあつても、餘りに驚嘆すべき變行であれば、時には之を矯正し、或は禁止することも已を得ないからである。

その具體的方策は多々あるであらう。わが軍所下にそれは着々實施されつゝある筈であり、何れにせよバリ島の島風やバリ人の氣質は出來得る限り尊

重して保護を加へ、保存することに努め、刺戟をさけて、なるべく彼等をして曾ての昔の如く島内に安住せしめると共に共榮圏建設の一翼たらしむる如く指導を加ふる必要があるであらう。かれらの風俗や習慣を無暗に矯正せんとしたり或ひは思想や宗教を強ひて改變せんとする如きは我らの採る可き策でない事は勿論であらう。要らざる反感や摩擦は、全く無用の事と云はなければならぬ。寧ろ、かれらの特異なる民族的な固性と特徴とを充分に生かして、その存立し得る途を構じてやるべきであらう。

確かに、前にも述べた如く、かれらは獨特の技術的な才能と思考的な頭腦とを有してゐるのであるから、指導の如何に依つては、豫想以上に大東亞共榮圏建設の強力なる一翼たらしむる事が出來るであらう。夢の國バリ島の存在から脱却し、單なる觀光の對象より一躍して、力ある近代的バリ島の更生を見る事が出來るであらう。

然し乍ら何と云つても、バリ島の誇りと價値はまづ第一に文化の見地から見らる可きは勿論の事であるから、その繰りも古き傳統の數々と神秘なる宗教とその神々、その珍奇なる儀式と祭典、之に緣由する美しき藝術と敬虔なる宗教生活とをあくまで純粹に且永遠に保存せしめるに適切なる指導を以てし、以て東亞の文化と歴史に誇り高き獨自の存在ならしめなければならぬであらう。

昭和十八年八月二十七日印刷
昭和十八年八月三十一日發行（五〇〇〇部）

パリ島の神々と祭典
定價一圓八〇錢
特別行爲稅相當額六錢

著者 伊藤知晄（いとうかずあき）
東京市芝區新網三ノ二〇
發行者 杉岡泰
東京市四谷區舟町二八
印刷者 吉福實
東京プリント株式會社印刷部（東京一二〇三）

出版文化協會承認ア
號 320338

發賣所 東京都小石川區久堅町九
海南書房
東京市四谷區舟町二八
振替東京一四七九八〇番
電話四谷二七三〇番
日本出版文化協會會員番號二二〇一三五

發行所 東亞開拓社
配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

951
22

昭和義勇隊開拓團長 研谷 謙著 B6 二五〇頁 價一・八〇 〒・一五

文部省推薦
大東亞省推薦

聖鍬部隊

第一年度の滿蒙開拓青少年義勇軍の中隊長たる著者が、渡滿以來哈爾濱外二訓練所に於て隊員と共に體驗せる生活と現境、並に激變する時代の影響等から義勇隊開拓團に渦立する氣を、隊員を中心に率直に綴つた記錄で、その貴重な體驗と素朴流麗な表現は義勇軍の手記「土と戰ふ」の幹部版として推賞に値する。

大瀧重直著 B6 三一〇頁 價一・八〇 〒・一五

隨筆集

滿洲農村紀行

新しい國造りの創造精神に共感した著者が、再三の滿洲行脚と先住民、日本人開拓者或は白系人との生活から感得した印象と感動を淳朴な筆に現したもの。

福田清人著 B6 二一五〇頁 價一・八〇 〒・一五

傳記小說

東宮大佐

「開拓の父」東宮大佐が、亞細亞再興の念願に燃え、新しい國造りの礎を築き上げた壯大な構想と多彩な生涯を、雄勁な筆致に描いた興亞文學の白眉。

平野直著 B6 三四〇頁 價二・〇〇 〒・一五

長篇小說

新十津川郷

大和の秘境十津川郷が、明治の初年水禍より起ち上つて北邊に我が國最初の分村移住を敢行した史實に取材した雄渾悲壯な開拓文學。

大瀧重直著 B6 二一六〇頁 價一・八〇 〒・一五

小說地

劉家の人々

大陸の曠野に移住し、馬賊や苦力作や珠求の陰謀にも屈せず開拓建設に勤む清人農家の一家と、滿洲建國後の新しい夢開拓を描いた日本人作家による最初の大陸產開拓文學。

東京市東京四谷區舟町一四七 振替東京 二八九〇八 東亞開拓社

東亞開拓社刊

1.86